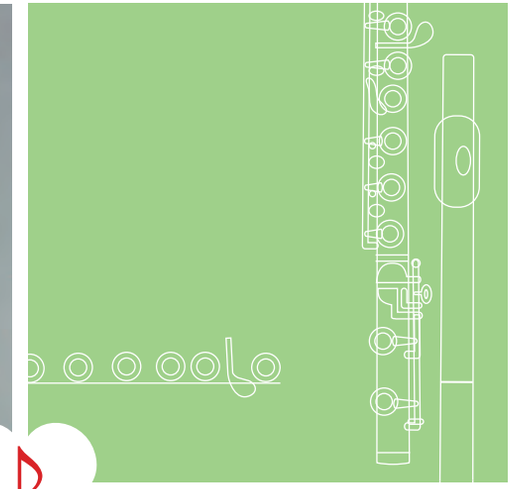
緑風舎
自由空間

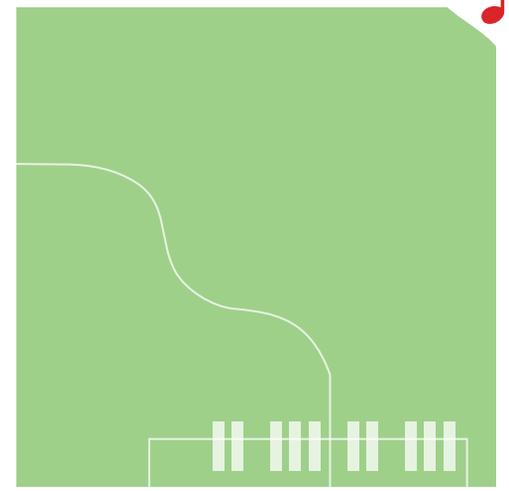
緑風舎コンサート

宮下直子デュオ・リサイタル

～野津　臣貴博を迎えて～

PIANO＋FLUTE





2020.7.26. Sun. 5:00p.m.-6:00p.m.

緑風舎音楽ホール

Today's Program

J.S. バッハ　ソナタホ短調　BWV1031

この曲は、第２楽章に有名なシチリアーノがあることで忘れ難いソナタですが、以前から、J.S.バッハの真作ではないということが論議されてきた問題の曲です。
しかし、そのような議論とは無関係に、第二楽章の美しいシチリアーノはピアノ曲への編曲などを通じて「バッハのシチリアーノ」として広く愛好されてきましたし、曲自体がすぐれた作品であるのは誰もが認めるところです。曲は３楽章からなっています。第1楽章はアレグロ・モデラートと指定され、ここちよい速度感で演奏されます。長い前奏があり、やがて、柔和でありながらくっきりとした感じのテーマが奏でられます。第２楽章は「シチリアーノ」と指定された、ゆったりしたテンポの「８分の６拍子」の曲です。一度聴いたら忘れられない美しいメロディーが心に沁みます。第３楽章は「アレグロ」で、活発な感じで快速に演奏されます。めまぐるしく音がとびかい、華麗に舞う舞曲ふうの音楽で、ピアノとフルートの対話がよく生きて、楽しい雰囲気を盛り上げていきます。

F. プーランク　フルート・ソナタ

プーランク晩年に完成され、20世紀のフルート・ソナタとして最高傑作と評される作品です。1957年、ストラスブール音楽祭で作曲者のピアノとJ.P.ランパルのフルートにより初演されました。これほどの作品に仕上がった理由としては、老境に入ったプーランクが、ドビュッシーの晩年のソナタを念頭に置いて作曲したこと、ランパルの協力を得て、細部までフルートの楽器の特長を汲み上げて書き上げたことなどが考えられます。３楽章からなり、第１楽章は「憂鬱なアレグロ」の標語の通り、調性感のはっきりしないテーマは軽やかに流れつつも鬱々とした気分を湛えています。第2楽章では悲しみの込もった旋律がこよなく美しく、この曲が人気なのもこの楽章の魅力でしょう。第３楽章では明るく快活な曲想ですが、それでも憂鬱な気分は残っていますし、中ほどでは第１楽章の中間部分の夢見心地な曲想が回想されます。

F. シューベルト　アルペジョーネとピアノのためのソナタ　イ短調　D.821

アルペジョーネはウィーンのギター製造者により発明された6弦の弦楽器で、チェロとギターの特徴を併せ持ち、「ギター・チェロ」という別名でも呼ばれていました。「アルペジョーネ・ソナタ」は、1824年、シューベルトによって、まさしくアルペジョーネのために作曲されたソナタでしたが、曲が出版された1871年にはすでにアルペジョーネは忘れられた楽器になっていました。シューベルトの最晩年に作曲されたこの音楽には、美しい叙情性に彩られたシューベルトならではの世界のなかに色濃く「死の影」が刻み込まれていて、その「悲劇性」もまた多く人々の心を捉える一因となっています。こんにちこの作品はもっぱらチェロやヴィオラで演奏されていますが、ギター、フルートなどでの演奏も多く聴かれます。

P.A. ジュナン　ヴェニスの謝肉祭 Op.14

ジュナンはフランスのフルートの大家で、80曲ものフルートとピアノの作品を残しましたが、「ヴェニスの謝肉祭」は最も有名な曲と言えます。曲はパガニーニが好んで使った導入部つきの変奏曲で、フルートの難しい技巧を多彩に織り込んだ難曲です。主題はヴェネツィアの古い民謡で、ジュナンよりはるか以前にパガニーニが同じ素材を用いて無伴奏ヴァイオリン用の「ブルレスク変奏曲」作品10を書いています。ジュナンは多分にそれに示唆されたのではないかと思われます。原曲では前奏、序奏を経て主題が奏され、第１から第４変奏、ゆるやかな曲想のアンダンテをはさんで第５から第８変奏と続き、フルートの躍動感と軽やかさが存分に生かされる曲です。

♬ピアノ ：STEINWAY HAMBURG製

宮下直子 *Naoko Miyashita : piano*

日本大会第１位。出口美智子、小林仁、井口秋子の各氏に師事。1983～88年ロンドンに留学し、マリア・クルチョ女史に師事。オックスフォード大学ジャパンソサエティに招聘されリサイタルに出演、浩宮皇太子殿下の臨席を賜る。一時帰国の際、大阪フィルハーモニー交響楽団とプロコフィエフの協奏曲第３番とラフマニノフのパガニーニ狂詩曲を協演。帰国後、和歌山、大阪、東京にてリサイタル、歌曲伴奏、室内楽で活動を開始、「紀陽コンサート」にて日本センチュリー交響楽団とシューマンの協奏曲を協演する他、内外のオーケストラと協演、オーケストラの鍵盤楽器奏者としても著名なアーティストとの共演を重ね、大阪クラシックなどの音楽祭、NHK-FM放送等に度々出演、文化庁アウトリーチに参加する等多彩な活動を行っている。
和歌山では、「サタデーアフタヌーンコンサート」等独自の企画によるコンサートシリーズを展開、2018年よりメディア・アート・ホールにて「楽興の時クラシックコンサート」をスタートさせた。また、ルルホールでは「宮下直子クラシックピアノの世界」、緑風舎では2014年より、フルートの野津 臣貴博、ヴィオラの廣狩 亮、ヴァイオリンの澤 和樹、ピアノの砂原 悟、チェロの林 裕の各氏をゲストに迎えてデュオ・リサイタルシリーズを続けている。
和歌山県文化奨励賞、和歌山市文化奨励賞受賞。
現在、相愛高等学校、相愛大学、相愛大学大学院、京都市立芸術大学、京都市立芸術大学大学院各講師。
きのくに音楽祭2020コンサートプロデューサー。

野津 臣貴博 *Mikihiro Nozu : flute*

静岡県沼津市出身。桐朋学園大学、英国王立音楽院を最高位賞(Dip.RAM) を得て卒業。その後アメリカ・エール大学大学院に奨学金を授与され入学。1990年から５年間フィンランド・ラッペーンランタ市交響 楽団首席奏者を務め、現在、大阪フィルハーモニー交響楽団首席フルート奏者。
ワシントンD.C.での NFAフルート・コンクール第２位受賞をはじめ、内外の国際コンクールに入賞。ソリストとしてこれまでにフィンランド、イギリス、アメリカ、ポーランド、イタリア、ドイツ、ルーマニア、中国等に招かれ、2004年、「尾高尚忠フルート協奏曲」をフィンランド初演。NHK-FM「フレッシュ・コンサート」「名曲リサイタル」他、出演多数。
151年前にパリで製作された銘器『ルイ・ロット（エスプリ）』を駆使する稀な名手。その音色と音楽性、テクニックは内外の指揮者より絶大な信頼を得ている。また、指揮者としての活動も多い。
相愛大学、大阪国際滝井高校、大分高校講師。2007年イギリス・ストラットフォード国際フルート音楽祭、2018年 中国・第2回泰山国際夏期音楽講習会招聘講師。全日本学生音楽コンクール、日本フルート・コンヴェンション・コンクール審査員。アジア・フルート連盟、日本フルート協会理事。
フルートを三浦 由美、小出 信也、ウィリアム・ベネット、ジェフリー・ギルバート、トーマス・ナイフェンガーに師事。
2010年より英国王立音楽院準会員(ARAM)。